別紙様式第４号

学 位 論 文 の 要 旨

医学系専攻　保健学分野 成人保健学ユニット	氏名	木下　愛未

題　目

Effectiveness of an Aggression Management Training Program in Japan: A Quasi-Experimental Study
（日本における攻撃性マネジメント研修プログラムの効果：準実験研究）

要　旨

精神科患者の攻撃性や暴力的行動の予防とマネジメントは精神科スタッフの重要な援助のひとつである。こうした援助の方法は、元来医療安全に焦点が置かれた強制的な身体拘束技術としての意味合いが強かったが、近年、攻撃性を誘発する可能性のある複雑な相互作用を理解し、ケアの視点で患者に介入することを重視するようになってきている。我が国唯一の攻撃性マネジメントプログラムは包括的暴力防止プログラム（Comprehensive Violence Prevention and Protection Program：CVPPP）であるが、CVPPP も2019年にケアを重視した方向を打ち出した。このようなケアのためにはスタッフが落ち着いて患者に配慮してかかわることが必要であり、スタッフのケアへの自信と、暴力に対するスタッフの攻撃的な態度の変容が求められる。したがって本研究は、CVPPP の研修前と研修直後、1か月後での受講者の自信と患者の攻撃性への態度の変化を調査し、これらの変化と個人特性の関連を調べることを目的とした。

2019年度の CVPPP 研修受講生のうち95名を対象に、一群事前事後テストデザインによる質問紙調査を行った。信州大学医倫理員会の承認を得て行い（承認：4502）、研究への参加がトレーニングに影響しないよう、研究参加者には協力できる場合のみ1か月後にすべての回答用紙を郵送してもらった。調査内容は、研修前に基本属性（性別、年齢、職種、経験年数、被暴力経験、受講動機）、攻撃性（BAQ）、看護援助特性（IPC-PC）患者の攻撃行動への怒りの程度、攻撃的な患者へのケアに対する自信、患者の攻撃に対する態度（ATAS）とした。研修前と一か月後に怒りの程度を比較（Paired T-test）、研修前・後と一か月後に自信、態度を比較（反復測定分散分析後に多重比較（ペアワイズ法））した。さらに研修前と一か月後について研修効果の有無で二群化した後、基本属性とは χ^2 検定で比較し、BAQ と IPC-PC は unpaired T-test で比較した。

結果、50名が回答した。研修の効果として、研修前と一か月後では、自信（$p<0.01$）、患者の攻撃に対するポジティブな態度（$p<0.01$）得点が有意に高く、患者の攻撃に対するネガティブな態度（$p<0.01$）、身体的攻撃への怒りの程度（$p<0.01$）、非身体的攻撃への怒りの程度（$p<0.01$）得点が有意に低く、CVPPP の1か月間の継続効果が認められた。研修効果と個人特性では、身体的攻撃への怒りの程度において、男性よりも女性が（$p<0.05$）、短気な傾向の強い方が有意に効果が高かった（$p<0.05$）。管理的で（$p<0.05$）、自己肯定的（$p<0.05$）な援助特性を持つ傾向のスタッフは、攻撃に対するポジティブな態度が改善した。女性、短気であることや患者に対し優位性の高い特性に有効性が示唆されたことは肯定的に評価できる。しかし CVPPP 研修は2005年の開発時から日本各地で行われ、対照群を設定できずホーソン効果の大きさを判断できなかったことは本研究の限界であり、今後の課題である。

研究指導教員　信州大学学術研究院（保健学系）教授　下里　誠二